

令和7年度 第2回佐久市自殺対策連絡協議会報告書

日 時	令和8年2月5日(木)13:30～15:00	場 所	佐久市役所 南棟 3階会議室
出席者	委員等 19 名 ・ 事務局 8 名 計 27 名		
会議内容			
1 開会			
2 あいさつ			
3 会議事項			
(1)地域における自殺の基礎資料について【資料1】(事務局)			
(2)心といのちの総合相談会について【資料2】(事務局)			
タブレット端末 チャイルドラインホームページのアイコン追加について【当日追加資料】(事務局)			
＜質疑応答＞			
・特になし			
(3)令和7年度佐久市自殺対策連絡協議会の反省と来年度への要望について			
・特になし			
(4)来年度事業計画について【資料3】(事務局)			
＜質疑応答＞			
・「中学生向け自殺予防啓発事業」SOSの出し方に関する教育の実施は、希望をすれば私どもも一緒に聞かせていただくことは可能か。			
→学校の授業の一環で実施しているため、学校との調整が必要になる。希望があれば調整させていただく。			
・去年ゲートキーパー養成講座を受けたが、発揮する場所がない。どういうところに行って、どういうことができるのか、はっきりしたことが知りたい。講習の中で具体的に伝えたり指導したりしてほしい。			
対象者の中にはうつ病や精神的な問題を抱えた方がいる。			
私自身も経験があるが「こういうことを言っちゃダメなんだ、こういう接し方をしなきゃダメなんだ」と学ばせていただいた。保護司会の講習会はレベルが高すぎたり、学生に対するような内容だったりすることが多い。主婦や高齢の方もいるので、「こういう対象者には、こういう風に対応、接すればいいんだよ」という、噛み砕いたわかりやすい講習を工夫してやっていただきたい。			
→来年度、ゲートキーパー養成講座フォローアップ研修も予定している。			
今後、講師と内容等について検討、調整していきたい。			
(5)その他			
・タブレットへのチャイルドラインホームページのアイコン導入について、1人1台持っているタブレットに載せていただき、クリックするだけでホームページへ飛べる、電話をする手立てができるということは、子どもたちの大きな力になる。12月の「さくさぽ」のイベント(テーマ:子どもの声を聞くということ)にゲストとして参加した際、不登校だった女の子と出会った。その子が、「学校へ行けず辛かった時、ふとした時にチャイルドラインに電話をして、私は助けられたんです。おかげで今は友達と学校に行けています」と直接話してくれた。チャイルドラインは一期一会で、その後の成果はなかなか見えないものだが、こうして「助かった」という話を聞いたことは本当に嬉しかった。女の子にどうやって番号を知ったか聞くと、学校で配られる「名刺代わりのカード」だった。毎年配布しているが、破棄されたり手元に残らなかったりすることが多い。それでも手元にあったおかげで電話をして助かった子がいる。			
タブレットには必ず(アイコンが)残っている。未来ある子どもたちが生きていく力になれるよう、これからも頑張っていきたい。			

《情報提供・話題提供》

「自殺対策基本法の一部を改正する法律の概要について」

長野県精神保健福祉センター 主査 竹内 美帆 氏

＜質疑応答＞

- ・子どもの自殺対策が強化されていますが、子どもがSOSを発し、一度危ない状況に陥った際、その後の生活再建に向けて保護者の方々は実際にどの程度協力的になっていただけているものなのか。
- 様々なケースがあるのが現状。家族が支援チームの一員として動ける場合は、回復や支援への繋がりが非常に早い。両親自身が課題を抱えていたり、精神的に余裕がない場合、協力関係の構築が難しい。「家族の状態が改善すれば、子どもも改善する」というシステム（連動性）が明確にある。
- 答えを出すのは容易ではないが、やはり家族と子どもは切り離せない関係にある。

《意見交換・情報交換》

○佐久地区保護司会

- ・困難家庭における多機関連携の必要性を感じている。保護観察期間が終了すると、法的根拠がなくなり、こちらから関与できなくなる。就労支援と貧困対策の仕組みづくりとして協力雇用主制度などはあるが、無資格・無能力では雇用に結びつきにくい現状がある。貧困の連鎖を止めるため、スキルアップを含めたきめ細やかな就労支援の仕組みを強化してほしい。
- ・本日、保護司がどのような役割を担い、どのような活動を行っているのかを記した参考資料を用意したので、関心のある方へ配布する。

○佐久市教育委員会

- ・学校現場での把握と対応の現状として、年度当初に「健康面に配慮が必要な生徒」の一覧を作成し、情報を共有している。養護教諭が学期ごとでさりげなく声をかけるなど、個別指導・見守りを継続している。管内の小学校でも深刻なオーバードーズ事案が発生し、低年齢化が顕著である。オーバードーズは単なる薬の問題ではなく、「自殺に直結する非常に危険な要素」として認識する必要がある。個別の指導や把握はある程度できているが、学校全体（全校生徒等）への指導については、課題がある。今後、学校として、あるいは地域全体として取り組むべき「大きな柱」として考えていく必要がある。
- ・市の子どもたちが利用するパソコン（タブレット）内に、直接相談ができるアイコン「タッチ」が導入されている。従来の教育相談窓口は保護者からの連絡が主であったが、「タッチ」は子ども本人が、誰も介さず直接教育委員会に悩みを送ることができる仕組み。「困っている」「心配」「誰に相談したいか」といった内容を子どもが発信し、それを教育委員会が受け止めて適切な支援へと繋いでいる。昨年1年間で40～50件の相談が寄せられた。解決が難しい課題も含まれるが、子どもたちが自らの意思で「不満や心配事を発信できる機器」が手元にあること、そして実際にそれだけの声が上がっていることが大きな意味を持っている。

○佐久薬剤師会

- ・学校薬剤師として、薬の正しい知識に関する講義を従来通り行うとともに、オーバードーズ事案を踏まえ、より早い段階での「薬物との向き合い方」に関する啓発について学校側と協議したい。

○NPO法人チャイルドライン佐久

- ・民生児童委員は、家庭訪問などを通じて、住民が最も「話しやすい相手」であり、対話の流れから子どもたちの状況や家庭の課題が見えてくることが多々ある。支援の現場では、ついアドバイスをしたくなり「話したくなってしまう」傾向がある。専門的なスキルを一度に習得するのは困難だが、「聴くこと（傾聴）」のポイントを絞って学習する機会を、市として設けてほしい。
- 「聴く技術」の習得や、具体的な支援の繋ぎ方に関する学習機会を設けられるかどうか、

民生児童委員所管の福祉課と情報を共有、連携しながら検討を進めたい。

○オブザーバー 長野県精神保健福祉センター

- ・困難な状況にある子どもや対象者にとって、誰か一人でも「寄り添い、力になってくれた大人」に出会えることは、その後の人生を大きく変える力になる。チャイルドラインへの相談で救われた事例のように、子どもたちが「困った時に助けを求められる力(受援力)」を身につけていくことが非常に重要である。
- ・子どもに関する話題が中心となったが、統計的には中高年の自殺者も依然として多い。特定の世代だけでなく、あらゆる世代に目を向け、地域社会全体で協力し、「自殺に追い込まれることが少ない社会」を皆様と共に目指していきたい。

○事務局

- ・昨年8月に開催された「第3回 政策甲子園」において、地元・佐久市の佐久長聖高校チームが最優秀賞を受賞した。メンバー自身の体験に基づき、将来的な自殺対策のあり方について真剣に考案されたものである。若い世代がこれほどまでに真剣、かつ前向きに将来の社会づくりを考えていることは非常に心強く、今後の対策においても大きな希望である。

《事務連絡》

- ・次回協議会については、来年度7月下旬頃開催予定。